いのち
生命のにぎわい調査団

生命のにぎわい通信

第 73号 : 令和 7年 (2025年) 1月　発行

発行 : 千葉県環境生活部自然保護課
生物多様性センター
〒 260-8682　千葉市中央区青葉町 955-2
(千葉県立中央博物館内)
TEL : 043-265-3601　FAX : 043-265-3615
URL : https://www.bdcchiba.jp/monitor-index
E-mail : monitor@bdcchiba.jp

千葉県で見られる渡り鳥

千葉県内で見られる鳥類の中には海外や国内の他地域から渡ってくるものがいます。しかし近年、これらの鳥類の個体数が劇的に減少しており、中には観察することが困難になってしまった種もいます。今号では県内で見られる渡り鳥（主にシギ類）の中から9種を紹介します。種名横の記号は千葉県レッドリスト（2019）のカテゴリー、写真隅の番号と文字は団員ID、主な飛来時期です。

ミヤコドリ（A）

全長は約45cm。干潟や砂浜、岩礁等の開けた海岸に飛来します。県内では干潟を中心に飛来するため、観察できる環境は多くありません。海岸では二枚貝やゴカイ類等の底生動物を捕食します。

タゲリ（D）

全長は約32cm。水田、蓮田、畑、河川、草地、まれに干潟等に飛来します。千葉県中部から北部を中心に、県内各地で見られます。昆虫類、甲殻類やミミズ類などを捕食します。

トウネン（D）

全長は約15cm。干潟、砂浜、水田、河川等に飛来します。甲殻類、貝類、昆虫類の幼虫等を捕食します。東京湾岸の干潟や九十九里海岸等で見られますが、生息地の消失等により減少しています。

ダイシャクシギ（A）

全長は約58cm。干潟や河口、砂浜、農耕地等に飛来します。カニ類や貝類、ゴカイ類、カエル類、昆虫類等を捕食します。県内では東京湾に飛来しますが、個体は少ないと言われています。

ホウロクシギ（A）

全長は約63cm。干潟や河口、砂浜、水田、草地等に飛来します。カニ類や甲殻類、ゴカイ類、カエル類、昆虫類等を捕食します。ダイシャクシギ同様、県内では東京湾に飛来しますが、個体は少ないと言われています。

ハマシギ（B）

全長は約21cm。干潟、砂浜、磯浜、河川、湖沼、水田等の湿地に飛来します。貝類、甲殻類、昆虫類、ミミズ類やゴカイ類などを捕食します。主に東京湾岸や九十九里地域で見られますが、減少傾向にあります。

ソリハシシギ（C）

全長は約23cm。干潟、砂浜、岩礁等に飛来します。干潟ではコメツキガニ等の小型の甲殻類やゴカイ類等を捕食します。東京湾岸や九十九里地域等で見られましたが、個体数は減少傾向にあるとされています。

クサシギ（C）

全長は約22cm。河川、湖沼、水田、蓮田等に飛来します。利根川流域、東京湾岸や九十九里地域等、県中部から北部でよく見られます。昆虫類、甲殻類、タニシなどを捕食します。

タシギ

全長は約26cm。水田や湿地、池、河川、干潟などに飛来します。ミミズ類、貝類、甲殻類、昆虫類等を捕食します。北総地域の平野部を中心に見られ、現状は千葉県レッドリストには選定されていません。

参考文献

千葉県. 2011. 千葉県の保護上重要な野生生物 -千葉県レッドデータブック- 動物編.
真木広造・大西敏一・五百澤日丸. 2014. 決定版 日本の野鳥650. 平凡社.
叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄. 2024. 山渓ハンディ図鑑15 新 日本の野鳥. 山と渓谷社.

最新の生物多様性に関する情報や各種講習会の情報は当センターと調査団のホームページをご覧ください
調査団 : https://www.bdcchiba.jp/monitor-index と生物多様性センター : https://www.bdcchiba.jp/

古典文学と里山の生き物たちの世界

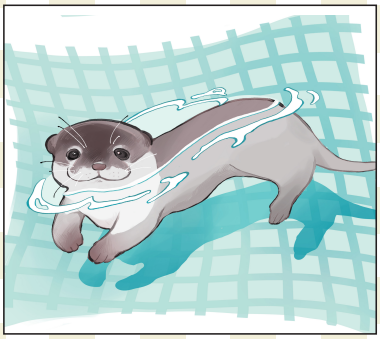
第二十七回　カワウソ

Lutra nippon　イタチ科

詩人　大島　健夫

日本の古典文学には、様々な生き物たちが様々な形で登場します。かつてこの国の人々はどのように生き物とかかわり、その姿に何を見ていたのでしょう。この連載では、生物多様性センターに勤務している、ポエトリー・スラム W 杯日本代表詩人の大島健夫が、生命（いのち）のにぎわい調査団の皆様を過去の世界にご案内します。

1444 年に最初の版が刊行された百科辞典『下学集（かがくしゅう）』には、カッパの項目があります。そこには、「カワウソが老いるとカッパになる」という記述がなされています。カッパという概念の成立には実にいろいろな要素がかかわっており、単純に「だからカッパ＝カワウソなんだよ」と言うことはできないのですが、少なくとも、カッパのイメージのベースのひとつに、カワウソの存在があることは確かです。



画　小林遥香

日本で「化ける」動物と言えば、多くの人がキツネやタヌキを思い起こすことでしょう。しかし、近世に至るまで、カワウソもそうとう化けていました。例えば江戸時代の随筆集『四四不語録（しふごろく）』には、若い女性に化けて侍を誘惑するカワウソの話が出てきますし、やはり江戸時代の随筆集『傍廂（かたびさし）』には、通りすがりの歌舞伎役者の差している傘を重くするといういたずらを仕掛けて、反対に殺されてしまうかわいそうなカワウソが登場します。このようにカワウソが半妖怪化してしょっちゅう人間と絡んでいたのは、ひとつには、かつてのカワウソがキツネやタヌキ同様、身近な獣であったからに違いありません。現在では信じられないようなお話ですが、明治時代初期には、まだカワウソはトキやコウノトリとともに、普通に江戸市中に生息していたことが記録から裏付けられているのです（守山他 , 2016）。道路わきの水路からひょっこりカワウソが顔を出す、なんてこともあったのでしょう。

そして、カワウソが化けるというイメージは、海外から連綿と輸入されてきたものでもありました。お隣の中国で、カワウソは日本に先んじて大いに化けています（北宋時代の『太平廣記』という書物には、カワウソがやはり美女に化け、けれども指がすごく短いため正体がバレてしまうというユーモラスな場面があります）。また、東アジアにおいて、カワウソが水神として祀られる存在であったという事実も無視できません。伝説によれば、10 世紀後半、ベトナムに王朝を打ち立てたディン・ボ・リンの父親はカワウソだったそうですし、中国の清王朝の元祖・ヌルハチの父親もカワウソだったといいます。

いま、私たちは水辺でカワウソに出会うことはできません。カワウソに化かされる人も、もういません。カワウソの絶滅は、カワウソに付随するイマジネーションをも私たちから奪い去ってしまったのです。生物多様性が失われることは、人間の文化の厚みが失われることでもあるのです。

＜これからの季節に観察できる生きもの＞

○調査対象種：イタチ、キジ、アカガエル類 (卵)、トウキョウサンショウウオ (卵)

○調査対象種以外

＊渡りのシギ・チドリ類、コガモやトモエガモなどのカモ類

＊ホソミオツネントンボやカメノコテントウなど越冬する昆虫

調査対象種以外は種の確認が難しいため、できるだけ写真の添付をお願いします。

「生命のにぎわいフォーラム」のご案内

生命のにぎわい調査フォーラムを開催します。調査団員の活動報告や写真コンテストを行いますので、多くの方のご来場をお待ちしています。

日時：令和７年３月８日 (土)　午後１時～４時

場所：千葉県立中央博物館　講堂

定員：先着 100 名・参加無料 (事前登録が必要です)

同時開催！　生命のにぎわい写真コンテスト

詳細は当センターのホームページやチラシをご参照ください。